

INTERVIEW：インタビュー



国際サッカー連盟 (FIFA)
カウンスルメンバー

第14代日本サッカー協会会長

田嶋 幸三さん

日本サッカー協会の会長も務められた田嶋幸三さんのインタビューをお届けします。日本らしいサッカーを世界で披露できる日本代表を作り上げてきた熱い思いに触れることができました。選手育成のノウハウ、法律家の役割など、サッカーに関心の薄い方にも読み応えがあり、必読です。

聞き手・構成：

浅石 裕一朗、富田 寛之、野間 自子

—— 本日は、よろしくお願いします。私も小学生のころからサッカーをしていたのでサッカー関連について色々とお伺いしたいのですが、本誌はLIBRAという弁護士会の会報誌なので、弁護士に関連した質問からさせていただきます。まず最初に、サッカー業界で求められている弁護士は、どのような弁護士でしょうか。

例えば、選手の移籍や給与不払いといったさまざまな問題が発生した際に選手をサポートしてくれる弁護士さんのほか、スポーツ仲裁裁判所 (CAS) というスポーツ界の枠内で解決を目指すことを目的とした国際的な仲裁機関がありますが、日本にもスポーツに強い弁護士さんが大勢いてくれたら心強いですね。

日本サッカー協会 (JFA) には役職員と、監督やコーチ、審判員などを含めて350人ぐらいいますが、労務問題は必ず出てくる問題ですので、そういったことを解決してくれる弁護士さんがが必要です。

国際サッカー連盟 (FIFA) の職員は約500人いて、そのうち1割以上、50人以上、弁護士さんがいるんです。日本でも、協会のガバナンスが健全か、法律に抵触するようなことがないかなどをしっかりと見てくださる弁護士さんがが必要です。

—— その他、このような弁護士がいたらいいなといった弁護士像はありますか。

我々の事業は多岐にわたっています。例えば、各カテゴリーのチームを編成したり、選手を育成したり、老若男女や障害者のサッカーの振興、それから指導者の養成などもやっていますし、メディカルセンターも運営しています。多岐にわたっていますから、全てを把握するのは難しい。ですから、全体を見て「これ危ないですよ。このまま実行したら法律違反になるかもしれません」など、リスクをチェックしてくれる弁護士さんが必ず必要です。

—— ハリルホジッチ監督の1円訴訟があったり、田嶋さんは色々な弁護士とかかわってこられたと思いますが、印象に残っているエピソードはありますか。

1円訴訟、ありましたね。そのときサポートいただいた弁護士の先生は、契約書を隅々まで確認し、しっかり対応してくださってとても心強かったです。そのほか、FIFA関連のことについては、必ずスポーツに強い弁護士の先生に相談しています。理事会の運営に関しては、ガバナンスに強い弁護士さんに確認しています。

お願いする際、「昔、サッカーをやっていました」という方は、若干、お願いしやすかったということはあったかもしれませんね。それを理由に選んでいるわけではないのですが。

—— スポーツ法に興味をもって、日本サッカー協会などで働きたいと思っている弁護士は、サッカー協会などに、どのような形で関与することができるのでしょうか？

各国のサッカー協会/連盟の専務理事の半数程が弁護士の方と関わっているんですね。JFAの理事会では、理事と監事を併せて17人中、弁護士の方が2人います。そのほか、顧問弁護士として別の事務所からお2人に、お願いしています。

—— 若手の弁護士がかかわるとしたら。

新しい分野ですので、逆に、若い弁護士の方に積極的にアプローチして欲しいですね。選手とクラブの移籍や契約交渉について、サッカー界では、世界的には弁護士が必ず絡むようになっています。

—— 日本においては。

FIFA公認のフットボールエージェントになるには、FIFAの試験を受けなければならないのですが、弁護士の皆さんには、積極的にそういうところに参加していただけたらと思いますね。特に、契約関係については、選手だけでなく、クラブ側にも弁護士が付いて、一方に不利になるようなことがないようにしていかなければなりません。

—— 契約関係で印象的なエピソードはありますか。

Jリーグではプロ契約というものがあるのですが、今では、権利関係がだいぶ変わってきているんですね。選手の肖像権、クラブが選手の肖像などをどこまで使えるのかなど。

—— 肖像権は注意が必要ですね。

まさにそうなんです。JFAはアディダスジャパンとオフィシャルサプライヤー契約を結んでおり、契約関係は弁護士さんのお力も借りて、丁寧に確認して対応しています。

—— 権利関係が厳しいですね。

この10年20年でだんだんと厳しくなってきていますね。例えば、私達日本代表のパートナー企業に自

動車会社がありますが、日本代表の試合を開催する場合、企業名が入った「〇〇スタジアム」という名称を使用することはできず、例えば横浜で開催する場合、「横浜国際総合競技場」と表記しなければなりません。

また、日本代表の試合で使うスタジアムの広告についても、パートナー企業以外の広告が映像に映り込まないように、マスキングをしているんですよ。

—— それは大変ですね。

とても大変なんですよ。そういったところは、広告代理店にお願いしている部分もありますし、しっかりとした契約書を作るために弁護士さんをお願いしているんです。大変と言えば、例えば、箱根駅伝では、映像に映り込んだ町の商店の広告に、スポンサー以外の広告が映り込んだら大変なことになるので、「ここではこの角度で写さない」などカメラマンがトレーニングをしているみたいです。

—— その視点で見ると、また違う楽しみがあるかもしれませんね。田嶋さんは、日本サッカー協会の会長としては、代表監督の選任や解任など、いろいろな決断をしなければいけないことがあり、その際には、様々な批判にさらされてきたと思います。会長時代の執務室に「無私」という掛け軸を掲げていらっしゃるんですけど、決断するときに、自分の中で信念や基準にしていることがあったら教えてください。

今浅石さんがおっしゃったように、これを言ったら私が誹謗中傷されるなどか、家族に危害が及ぶようなことがあるのではないかとといった不安がよぎらないわけではないのですが、それを飲み込んで、日本のサッカーをどうするか、それにとってプラスかマイナスかというようなことで決めてきましたね。

—— 誹謗中傷もすごいですよね。

本当に酷いです。私自身も相当されましたけど、選手に対して、プレーに対する批判ではなく、外見やルーツなど個人的なことにに関して誹謗中傷することは、本当に許せません。実は、日本代表の試合でミスをした選手に対して、プレーとは関係ない個人的なこと

で誹謗中傷するケースがあまりにも酷いので、JFAとして犯人を突き止めて徹底的に闘おうとしたことがあるんです。しかし、選手から「それはやめてください。これはサッカーで返すしかないんで」と言われて、結局、弁護士さんを頼まなかったんですよ。その時、選手から「こういうのは、慣れてますから」と言われたのが本当に切なかったですね。

——すごい覚悟ですね。サッカーで返すしかないって。

本当にすごい選手だと思います。誹謗中傷するような人を相手にするより、自分と向き合って技術を向上させることに時間を使ったのだと思います。

——ちょうど、LIBRAの4月号で、発信者情報を特定するために東京地裁の裁判官のお話を載せているんですよ。

個人的には、誹謗中傷するような人には、ちゃんと自分のやったことを反省してもらいたいですね。

——今回、インタビューにあたり、田嶋さんのことを調べさせていただきまして、アンダー世代の監督や技術委員長を歴任されたり、補欠ゼロ、8人制サッカーの導入など本当に色々な育成や環境整備に携わってこられたことを知りました。今、日本でサッカーが盛んになって、日本代表が強くなったのは、田嶋さんらの努力のおかげなんだと感じました。

そんなことはないですけど、でも、皆で夢見てきましたからね。ワールドカップに出たいって。

——田嶋さんは、選手を引退後、ドイツにコーチになるために留学されて、日本でも、育成にご尽力されてきましたよね。

育成が命だと思っています。代表になったから急にうまくなるわけじゃないんです。気持ちのことも含めて、子供のときから「日本のサッカー」というものをちゃんと植え付けていって、初めて日本らしいサッカーになっていくんです。ありがたいことに、そうやって育った選手たちが、日本らしいサッカーを追求した結果、海外のトップリーグでも活躍できるようになってきました。この成果は、間違いなく選手育成や、育成

を司る指導者の養成、これがあったからだと思っています。

——ドイツに行かれたときに、何か印象的なエピソードはありますか。

ドイツでは、12歳以下の子供も教えましたし、18歳や19歳の子供たちのコーチもしていましたが、子供たちの意識が、「試合に出てなんぼ」という意識なんです。だから、それぞれのチームに在籍する選手は少なく、11人が先発だとすると、サブを入れて18人ぐらいしかいません。それでも試合に出られない子が出てくるわけですが、そうすると、子供の方から直接、「どうして僕のことを使ってくれないの？」と正面を切って聞いてきます。「いやいや、まだ1歳若いのだから大丈夫だよ。来年出られるよ」なんて答えると、「はい、分かりました、じゃあ、やめます」と言ってやめて別のクラブに行ってしまう。要するに試合することがサッカーだという意識が強いわけです。そして、この意識が、生涯スポーツ、サッカーを生涯やり続けることにつながっているんです。まさに、サッカーをするということの大切さを僕はドイツで学びましたね。

——日本の高校の部活では、200人近く選手がいるチームもありますよね。ただ、今、どんどん部活が少なくなってきて、地域のクラブに移行し始めていますね。今、日本サッカー協会では、2050年までに1000万人サッカーファミリー（サッカーに関わる人）を作るという約束をしていますが、そのためにも部活はあった方が良いですよ。

いや、なきやだめですよ。地域クラブに移行ということが、決して悪いことではありませんが、日本ってスポーツ施設があるのは学校なのですよ。ヨーロッパとかには、学校にスポーツ施設なんかありませんよ。

——部活は、日本の独自のいい文化なのですね。

いい文化です。以前オーストラリア大使館に行ったときに、大使から「日本の部活はいいですね」と言われましたね。僕らは部活の重要性を訴えていますし、それを伝えていこうということをやっているのですけどね。

—— 日本サッカー協会では、2050年に日本でワールドカップを開催して優勝する約束を掲げられていますね。

SAMURAI BLUE (日本代表) の選手たちは来年のワールドカップで「優勝する」と言ってくれているので、「約束」が前倒しになっているのですが、それはそれで本当にありがたいことです。彼らの多くが海外のクラブに所属し、ドイツやスペインの代表クラスの選手と一緒に練習していますし、毎週、世界レベルのクラブチームと真剣勝負をしています。そのような環境でやっていて手応えを感じれば、日本は優勝できるって言いますよね。

森保一監督もそう言ってくれていますから、JFAも、今、宮本恒靖会長を中心に全面的に協力して応援するという体制をつくらうとしています。

2005年に「JFA2005年宣言」をし、「2050年までに優勝する」と発表したときには、一部の人たちから嘲笑されたものです。それが今では、多くの人が実現できない目標ではないと思うようになってきた。これは本当に大きなことだと思っています。

—— 比較的このような短期間に強くなれたのは、どのような要因があるのでしょうか。

それはやはり多くのサッカー関係者が手を携え、真剣に選手育成に取り組み、普及活動をしっかりと行い、その内容についても指導者と一緒に議論したことだと思います。

1998年にワールドカップに初めて出場して、そこから8大会連続、今度8大会目ですよ、その間に自分たちに何が足りないかを常に考えながら、改善、改善、改善をやってきたこと。これが間違いなく今につながっていると思っています。

—— 今の日本代表のメンバーには強力なストライカーが不足しているようなことを言われますが、どのように思いますか？

上田綺世、町野修斗、前田大然など、日本らしいストライカーは出ていますし、逆に三苫薫や久保建英、



伊東純也といった、両サイドでも点を取れる選手がいますから、これからまた新たなスタイルのサッカーを展開すれば、1人のストライカーに頼るだけのサッカーではなくなるという気もします。

—— 先ほど日本らしいサッカーをというお話がありましたが、日本らしいサッカーというのはどんなサッカーなんですか。

小さいエリアの中でのスピードって日本人が一番優れているんですね。狭い中でも技術を発揮でき、プラス、コレクティブ。いわゆる、みんなが連係して動ける。これはもう今、僕は日本が世界一だと思っています。一人の、王様みたいなストライカーがいるよりは、今のSAMURAI BLUEのように、久保や三苫や鎌田大地、伊東、南野拓実、堂安律などなどどこからでも点が取れて、献身的にチームのために動きながらディフェンスもする、攻撃も行う。これが日本らしいサッカーだと思っています。これまでワールドカップ7大会を戦って、それがやっと確立されてきたと思っています。

—— ワールドカップ優勝を目指して、頑張ってください。心から応援しております。本日はありがとうございました。

プロフィール たしま・こうぞう

1957年熊本県出身。浦和市立南高等学校、筑波大学卒業。大学4年時に日本代表に選出され、国際Aマッチ7試合出場。卒業後は古河電気工業(株)に入社し、同サッカー部でプレー。1983年からドイツに留学して指導者ライセンスを取得。1999年、U-16・U-17日本代表監督としてユース世代強化に取り組み、2002年、日本サッカー協会技術委員長として指導者養成を推し進めた。2016年から2024年まで同協会会長(第14代)。2015年から国際サッカー連盟(FIFA)理事、2016年から同カウンシルメンバー。